
神の少女と悪魔の少年

K1.M-Waki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神の少女と悪魔の少年

【Nコード】

N1490X

【作者名】

K1・M・Waki

【あらすじ】

天界の神と地獄の悪魔は人類をめぐって対立していた。

人類絶滅計画が進まないのに業を煮やした悪魔は、最終計画を実行に移した。優れた知能を持つ男を地上に誕生させ、その天才頭脳で人類絶滅の最終兵器を開発させるのだ。

対する神もエージェントを地上に産み出したが、彼女の知能は悪魔の落とし子よりも遥かに劣っていた。

絶対の自信を持った悪魔たちだったが、そこに誤算が生まれた。

悪魔の落とし子が神の落とし子に恋をしてしまったのだ。

プロローグ

世界は、その原初には光しかなかった。闇の無い世界では、全てが光り輝き全てが平等であり、全てが一つのものであった。そこでは御父なる神エロヒム自身、他とは区別できなかった。

そこで御父なる神エロヒムは、御子ヤハウエに命を下した。

天使ルシフェル「御子ヤハウエは、天使の3分の1に耳打ちし、神に逆らい、御父なる神エロヒムと残り3分の2の天使軍に反逆を仕掛けた。

そして天の軍勢に敗れた反逆軍は、地の底に落とされ闇が現れた。

光に対して闇が生まれることで、物事の境界が生まれ、天と地の諸々が形を成すことが出来るようになった。

神々と天使は天上の天界に、地の底に落とされた者は悪魔と呼ばれ、地獄界に住まうようになった。その後、御父なる神エロヒムと御子ヤハウエは、天界と地獄界の中間である地上に、諸々の生物を作り住ませた。最後に土より最初の人間が作られた。その人間はただ一人きりで、両性具有ではあったが、愛を知らず、人間が増えることは出来なかった。そこで、御子ヤハウエは人間の遺伝情報から一部を抜き取りY染色体を持たすことで、最初の男「アダム」となった。そして、アダムの遺伝情報を元に新たなX染色体を持った第二の人間イブを創った。不完全なX染色体を持たされたイブは最初の人間とは異なり、両性具有とはならず女の姿であった。

更に、ルシフェル「ヤハウエは、人間に知恵の木の実を与えることで、愛を教え、人間が自分たちだけで増えていくことが出来るようになった。

こうして、最初のアダムとイブから人々が生まれ、地上に増えることになった。

だが、地下の悪魔たちはそれを良しとしなかった。神々の姦計により貶められた彼らは、それでも神を慕い愛していた。その神が、天使よりも、土くれから成った人に祝福を与え愛できるようになったのを見て、憤りを覚え、人間達を憎むようになった。

これより、神々は人間を愛するもの、悪魔は人間を憎むものとして存在するようになった。

人間を憎む悪魔達は機会があるごとに、人間を悪へと誘い地獄界に引き入れようとした。それでも全ての人間を地の底に引き入れることは出来なかった。その一生の大部分が繁殖期である人間の増える速度が遥かに高かったためである。また、天上界の神々との契約により、神も悪魔も地上の人間には直接に、接することが出来なかったためでもある。

怒り心頭の悪魔達は、人類抹殺のための最終手段をとることとした。

一組の選り抜かれた男と女を交わらせ、最高の知能を備えた男を地上に生み出させた。悪魔に生み出された男は、その類まれなる知能により、最悪の破壊兵器を生み出し人類を最終戦争で絶滅させる運命を持たされた。

それを知った天上の神々は、精霊ルーハをして、同様に優れた知能を持つ人間を神のエンジニアントとし、最終戦争を阻止するよう命じた。だが、そこに誤算が生まれた。精霊ルーハは神々の落し児を女として創ってしまった。アダムより作られしイブは、アダムよりも劣化した遺伝子群を持たされたため、落し児の知能は悪魔の落し児である男に遥かに及びのつかないものと成ってしまった。それでも、神々はその落し児を愛で、また人を、諸々の生き物を愛するようさせた。

悪魔の子と神の子が生まれて幾年かが経ち、共に愛くるしい少年

と少女となった二人は、とある偶然から出会うことになる。当然、悪魔の生み出した天才に、神の子が及ぶべくも無かった。悪魔達は自分達の勝利を疑わずほくそえんだが、悪魔側にも誤算が生まれた。それは、少年が少女に恋をしてしまったことだった・・・。

第一章 天才少年と天然少女

その日、彼は一人教室にいた。もうすぐ夕暮れの誰もいない教室は薄暗く、開け放された窓から寂しさを風に乘せて吹き込まれているようだった。

少年は一人自分の席で、腕を組んで座っていた。目を半眼にしてほとんど表情を見せない彼の顔は能面にたとえる事ができたかもしれない。

いつからそうしているのか、微動だにしない彼が、かつと目を見開くや、机の上のノートに猛スピードで何かを書き記していった。複雑な図形やアルファベットと矢印で記載されたそれは、何かの化学反応式と思しきものであった。

「ふふふ、できたな」

ひとしきり反応式を書き終わった彼は、満足げにニヤリと微笑した。

化学者や薬学の専門家が見ても、この反応式を解析するには何時間もかかるう。それ以上に、それが超遅効性の猛毒の生成式であることに気がつくものが世界に何人いるだろうか。無味無臭のその毒薬は、服用してから半年もの時間を経た後、突然に効果が現れ始める。末梢神経から徐々に徐々に全身の神経系に働き、凄まじい痛みを伴い3年もかけて死に至る猛毒に解毒剤は無い。また、痛覚を抑える術も無い。服用された人間に穏やかな死は絶対に訪れないのだ。こんな猛毒を発明し悦に入っている彼を『悪魔の使者』と呼んでも、誰も非難しないだろう。

薄明かりの中で、彼は、今しがた書き終わったばかりの化学反応式の書かれた紙を何の未練も無く、折りたたみ始めた。程なく、紙飛行機を折り終わった彼は、それを開け放たれた窓から、外に飛ばした。再び能面のごとき無表情になった彼は、また腕を組むと何も無かったかのように座りなおした。

それから十数分でも経ったときだろうか、廊下からパタパタと音が聞こえて来た。音の主はだんだんに近づくと、閉まっていた教室の扉を開けて姿を表した。

「ごつめくん、遅くなっちゃった」

声の主は息を切らしてそう言いながら、二本のお下げ髪を振り乱して教室へ入ってきた。

「ごめんねえ。大分待ったあ」

「それなりになりな」

少年はややぶつきらばうに応えた。

「どうやったら目と鼻の先の職員室からここまで一時間もかけられるんだ？ この俺の頭脳をもってしても計算できんぞ」

「うん、ちよっとお茶を買いに行ってたのね。そしたら、どの自販機も売り切れで、これ一本しか買えなかったの」

お下げ髪の少女はそう言うのと、500mlペットボトルのお茶を差し出した。

「走ってきたから、のど乾いちゃった。先に飲んでもいい？」

「それはかまわんが、・・・どうしてそこでお茶が出てくるんだ？」

少女は、ペットボトルのフタをあけると、軽く一口飲み、

「・・・ふう。あのね、おべんと作ってきたんだ。一緒に食べようと思って」

そう言いながら、彼女は飲みかけのお茶を彼の机に置いた。少年は濡れた彼女の唇に見とれながら、こう言った。

「何で今弁当なんだ？ 昼と一緒に購買で買ったパンを食べただろう」

「へへへ、博くんがお昼パンだつて聞いたたら、わたしも食べたくなくなっちゃって。だって、購買のメロンパンですごく美味しいんだよ」

「それは分かっている。でも、弁当を作ってきてたんなら、それを食べればよかったんじゃないのか？」

少年、阿久津 博は、まだ腕を組んだまま、彼女を見上げてそう

いった。

「あははは、作って来てたのすっかり忘れちゃてて。それに、お茶買いに行ってたなら、ちよつと小腹もすいちゃって。だから博くんと食べようかなって思ったから・・・」

少年は、それは本末転倒じゃないかと思ったが、

「しょうがないなあ。じゃあ、半分喰ってやるよ」

と、組んだ腕をほどいた。左手が、机の上の飲みかけのペットボトルにふれる。

「あつ、お茶飲んでいいよお。一本しかなかったから半分こね」

「えっ・・・」

少年は一瞬たじろいだ。これは、間接キスじゃないのか？ いや、それはそれでうれしいのだが、・・・そうだ、口の触れていない反対側から飲めば・・・、いやいや、その後あいつが無造作に口をつけたらどうなるのだ？ まてよ、時間が経つと唾液は乾くから大丈夫なのかも知れないが。むむむ、そういうことが問題なのではなくて・・・。

猛毒も難なく発明できる少年の頭脳はフル回転でこの問題を考えていた。才能のムダ遣いとはこのことである。

「どしたの？」

少女が覗き込むと、少年はあわててペットボトルを引っつかむと一口咽に流し込んだ。

しまった、やってしまった。間接キスだ！ どうしよう・・・。

と少年が耳を赤くしているのを全く気にせずに、少女は自分の席へ、トコトコと歩いて行き、水色と白のチェックの布製バッグを持ってきた。

ちょうど少年が左袖で口をゴシゴシやっていると、

「そのお茶美味しかった？ 博くん好きだったよね」

「生美、もしかしてこのブランドのお茶を探し回って一時間もかかったのか？」

「そだよ。・・・よいしょっ」

少年はペットボトルを見つめながら、

「もしかして、他のお茶ならすぐ買えたんじゃないのか？」

と少女、榊 生美に訊いた。

「あれ？ そか。そうだよねえ、あははは」

悪びれもなく笑う少女は、机の上のペットボトルを両手でつかむと、もう一度お茶を飲み込んだ。そして、大小二つの包みを取り出すと彼の机に置いた。

「何で、二つもあるんだ？」

「おつきい方が博君のだよ」

「二人分作ってきたのか？」

「そだよお。一緒に食べようと思って」

「・・・なら、そもそも購買へ行く必要なんかなかったんじゃないのか？」

「んー、そうだねえ。でも、こうやって放課後二人で食べるのもおつなもんだよお」

「そうか？・・・そうなのか？」

IQ520もの少年の知能を以ってしても、なぜかこの少女の行動は計算できない。

言われるままに、少年は大きいほうの包みを広げると、弁当箱のフタを開けた。白いご飯に真ん中に梅干、煮しめや玉子焼きにプチトマトとポテトサラダ。から揚げの傍のタコさんウインナーがウインクしている。恐る恐る弁当に箸を付ける。

「どお。おいしいい？」

「うん、まあまあだ」

「そか、よかったあ」

にこやかに微笑むと、少女は自分の包みを開け、自分の分の弁当を食べ始めた。

「おまえ、自分のはやけに少ないなあ」

「そかな？ 女の子のおべんとって、大体これくらいだよお」

「・・・そうか？ だが、俺の計算では、それでは夕方まで持たな

いぞ」

「大丈夫だよ。間食したりオヤツ食べるから。それに今は夕方だし」
「そう・・・なんだ」

何か釈然としないまま、少年は、再び自分の弁当をかき込み始めた。

（夕食前としては、少し多いかな。まあ、その分夕食を減らせばいいだろう）

そう思いながら、何気なくお茶のペットボトルをつかむと、一口飲み込んだ。

と、そのとき、

「や、やだあ。博くん、間接キスになっちゃう」

真っ赤になつて、少女は少年の手のペットボトルをつかむと、強引に引つ張った。

「まつ、待てよ！ 危ないぞ。こぼれるじゃないか」

少女は真っ赤になつて、ペットボトルをひつたくと、それを抱きかかえて、その場にしゃがみこんだ。

「さつきは、何も言わなかったじゃないか」

「さつきと今は関係ないの！ 博くん全然わかってないっ」

「ええっ、そうなのか？ 俺が悪いのか？」

少年も真っ赤になりながら、この場をどう繕うかと頭脳をフル回転させていた。

（直飲みはダメなんだから、そうか、コップがあればいいのか。コップといえば、・・・あつ、あれがあつた！）

「生美、ちよつと待ってろ」

そう言うのと、ダッシュで教室を飛び出した。

しばらくして帰ってきた少年は、肩で息をしながら片手に持った紙コップを見せた。

「こ、これは・・・す、すぐ近くの自販機で・・・買った、オレンジジュースだ。・・・これを一気に飲み干せば・・・ゲフッ、か、紙コップの完成だ。・・・これにお茶を注げば、も、問題・・・な

いだろっ」

「うん。・・・じゃあ、お茶入れるね」

半分泣きべそをかいている少女は、ペットボトルから空の紙コップへと、お茶を注いだ。

「こ、これで・・・も、もう問題、ないなっ」

「うん。・・・ごめんね」

もじもじしている少女の愛らしさに、ぼつとしながらも、少年は紙コップを机に置くと、自分の席に座った。ほつとしたたん、腹がグーと鳴いた。少年は、まだ弁当を食べかけだったことに気づくと、残りを食べ始めた。

少女も半分下を向いて弁当を食べる。

特に何か雑談するでもなく、二人は弁当を食べていた。少年はなんとなく気まずさを感じながらも、「こんなのもいいか」と、内心満足していた。

高校2年の今まで、異性と付き合ったことも数回ある。中には深い仲になりかけた時もあった。でも、今はこの少女がひどく愛しい。ただ二人でいる、その時間が何よりも貴重に思えた。この娘の為に、世界を相手にしても怯まないだろう。

いつも感じていた、『自分には何かやることがある』という切迫感も、この少女といると、薄らいで、妙に落ち着くのだ。

「お茶、注ぐ？」

彼女が唐突に訊いた。ややうつむきかげんなのは、この顛末からは仕方がない。

「ああ、頼む」

と、紙コップを差し出した。とくとくとお茶が注がれる。壁の時計がカチカチと鳴る音が響いていた。もう夕方近くになっていた。

「ごちそうさまでした」

「・・・おそまつさまでした」

しばらくして弁当を食べ終えた二人は、帰宅することにした。

まだ明るいつ夕刻を、二人並んで家路を歩いていた。

「もう遅いね」

「ああ」

「二人だけだね」

「そうだな」

「デートみたいだね」

「ブハッ」

少年は、噴出してしまった。少し頬が赤くなっている。

「な、なんてコトを言うんだ」

「だってさ、いい感じじゃない？」

少女も少し顔を赤くしている。

「ねえ・・・、手えつないでも、いいかな？」

少女はややうつむき加減で、小声でささやいた。

「・・・・・・・・」

少年は即答することが出来なかった。

「だ、だめかなあ」

もう一度少女が訊いた。

「・・・い、いいぞ。手えくらい」

少年は、そっぽを向いて、ようやくそう応えた。

「そか。よかったあ」

少年を見上げる少女の目が少し潤んで見えた。

互いに探り合うように、少しずつ指を絡ませていく。

「博くんの手、冷たいね」

「ああ」

「わたしが、あつためたげるね」

「うん」

少年はこの時、分かれ道が永遠に來なければいいのに、と思っていた。そんな幸せを感じさせる時間だった。

だが、そんな時間も長くなり、程なく二人は分かれ道に到達した。

「じゃ、わたし、こっちだから」

「ああ、気を付けてな」

「また明日ね」

少女は元気にそう叫ぶと自宅への道を駆けていった。

「そんなに走ると、転ぶぞー」

「だいじょーぶだよぉー」

振り返った少女が手を振っていた。

と、その時、脇道から出てきた男達の集団にぶつかって倒れたのが見えた。

「生美、大丈夫か！」

少年はすぐさま少女へと走っていった。

駆けつけるなり、少女のそばへと行く。

「どうした？ 転んだのか？」

「いたたた、・・・こけちゃった。恰好悪いなあ」

「大丈夫か？ 怪我は無いか？」

少しあわて気味の少年はそう問うた。

「うん。少し擦りむいただけ」

そう言つて少女は左手を見せた。手のひらに泥と血が混じって付着している。

「見せてみる」

「大丈夫だよぉ」

「だめだ、・・・少し擦りむいているな。最初だけ少ししみるが我慢しろよ」

そう言つと、鞆から小さなスプレー缶を取り出すと、少女の傷口に薬液を吹き付けた。

「消毒と局部麻酔剤のスプレーだ。俺の開発した人工抗体も入っている。・・・後は、この人口皮膚を貼り付けて、・・・これで大丈夫なはずだ」

少女のDNAから作られた人工皮膚は、数分で傷口と付着し、明日の朝には後も残さず完治しているだろう。これも少年の開発したものである。

ほっとしたのもつかの間、ぶつかった男達が横槍を入れてきた。

「あ前らあ、なあ、ぶつかってきといて、そりゃあ無いだろう」

「わびくらい言えよ、なあ」

少女はあわてて立ち上がると、男達に向かってお辞儀をして「ごめんなさい」と謝った。

だが、彼らはそれだけでは満足しなかったようだ。

「痛いー。痛いよう」

中の一人が地べたに座り込むと左足をさすっている。

「てめえのぶつかった所為だぜ。折れてでもしたらどうすんだよ。治療代くらい出してくれるんだらうなあ」

と、いきなり因縁めいたことを言い出した。

「ええ！ 大変。どうしよう博くん」

少年は、落ち着いて大声で騒いでいる男に近寄った。

「おい、足か？ 見せてみる」

そう言う少年に、彼らは少し不気味なものを感じた。

「な、な、何だよ」

「見せてみると言ってるんだ。折れてるかも知れないんだろ。心配するな、俺は中学のときに留学してイギリスで医学博士の称号を取ったんだ。『国境を越える医師団にも』参加した。もちろん、国際医師免許も持っている」

そう言っつて男の足を触りだした。

「ふむん、折れてはいないようだが、・・・あつ、これは」
と言うなり、男の足を少しひねった。

ゴキリという音がした。

「グギャー、ててててててえ！」

痛がっていた男が、急に本気の悲鳴をあげ始めた。

「て、てめえ、何しやがった！」

周りを囲んでいる男達が、迫ってくる。

「大変だ、足の関節がはずれている。きつとぶつかって転んだときに脱臼したんだ」

少年はまじめな顔でこう応えた。

「脱臼は痛いぞ。それに靱帯が痛んだら、リハビリしてもなかなか元のように歩けなくなるぞ」

「ワギャー、痛てて、早く何とかしてくれえ」

少年はニヤニヤしながら、

「早く医者に行った方がいいぞ。一生歩けなくなるぞ」と、逆に男達をあおりだした。

「てめえが、何かしやがったんだろう。ぶん殴ってやる」

怒り心頭の彼らに、

「いいのか、こんなことしてる暇があったら、早く病院に連れて行ってやれよ。本当に手遅れになるぞ」

と、何の悪びれも無く少年は応える。それに加えて、さっきから少年に不気味な雰囲気を感じていた男達は、逆にあわてだした。脱臼した男を持ち上げて運ぼうとするが、あまりの痛さにじっとしてないために、持ち上げるのにさえ苦労していた。

「俺が治療してやろうかあ。さっきも言った通り、俺には医学の心得がある。治療代は、まあ、ロハにしろいてやるよ」

ニヤニヤと笑みを浮かべて、こう言う少年に、男達は背筋に冷たいものを感じた。だが、仲間の様子を見ると、少年に治療してもらうしかない、考えたようだ。

「なら、お前、治してみろよ。治らなかつたら、た、ただじゃおか
ないぞ」

「痛ててて、助けてくれよお」

なおも痛がる男の側に少年はひざまずくと、足をいじり始める。

「い、痛い、痛い」

「少し我慢しろ。脱臼ははずれたときより、入れるときのほうが痛いんだ。こら、そこに突っ立てるの。二・三人こっちに來て押さえつけてくれ」

そう言われて、男達が怪我人を介抱するように押さえ込んだ。

「麻醉は無いのかよお。さっき使ってたじゃないかあ」

「あれは使い切りだ（↑嘘）」

少年は、両手で足を持つと、さっきとは逆方向にひねるように動かした。

「よし、行くぞ。・・・せゝのっ」

今度はボコンという音がした。

「ギャー――」

痛がっていた男は白目を剥き、泡を吹いて悶絶した。

「さて、治ったぞ。念のために、本物の医者に見せたほうがいいぞ、ククク」

路地に映る少年の影に一瞬悪魔のそれが重なって見えたのは、気のせいだったのだろうか。

「お前え、今度逢ったらただじゃおかないからな」

「覚えとけ、このやろっ」

男達は、気絶した男を何とか担ぎ上げると、元來の方へと引きずっていった。

「低脳どもめ、好きなだけ騒ぐがいいさ」

悪魔の如き笑みを浮かべて、少年は彼らが去ってゆく様を嘲るように見ていた。振り向くと、少女が頬を膨らませて睨んでいた。

「博くん、意地悪です。あんなことしなくても治せたでしょ」

（お、怒っている。何故だ）

「怪我してたのを治してやったんだから、いいだろう?」

ペシという音が鳴って、少年の両の頬が少女の両手に挟まれていた。

「あんなひどいことしたら、ダメなんだから。もう、手をつないであげない！」

「おいおい、そりやないだろう。勘弁してくれよう」

少年が心底情けない声で謝っている。

時刻はもう夕暮れ時になっていた。夕日が二人に影を与えている。地面に落とす少女の影に、対の翼があるように見えたのは錯覚だったろうか。

こうして、人類は絶滅までのタイムリミットを一日だけ延ばしたのだった。

第二章 フェロモンは危険な匂い

少年は眠っていた。いつに無く深い眠りだった。眠りの淵から誰かがささやいている・・・。

（思い出せ・・・、お前の使命を。お前のやるべきことを。思い出せ、思い出すのだ・・・）

子供のころから続いている、いつもの夢だ。少年は考える。

（何だ・・・、俺のやるべきこととは。何をしなければならぬ・・・）

いつも答えは出ない。でも、既に知っているような気もする。では何故思い出せないのか？ 判らない。何をすればいいというのだ・・・。

「阿久津は今日も居眠りか！ わしの授業で堂々と居眠りするやつにはこれをくれてやるわ」

こう言つと、教師は手に持ったチョークを少年に投げつけた。

チョークが少年の額を直撃する直前、詰襟の学ランを改造した防護スーツが自動防衛行動を取つて、チョークをはじ返した。はじき返されたチョークはそのまま教壇へと飛び、見事に教師の額に命中した。

「あはははは」

学生達の嘲笑が木霊する。恥をかかされた教師は、少年の席に歩を進めようとしたが、ちょうどその時「キンコーンカーンコーン」とチャイムが鳴った。

「うう。今日はここまで！」

と、苛々した調子の教師は、教室を出るなり、ガシャンと力任せに扉を閉めた。

「博くん、もーお昼だよ」

少女ー榊 生美は少年を揺すっていた。

「博くん、いつまで寝てるのぉ」

少年が、目を覚ます。半覚醒のまま少女を見上げた。

「おはよ、博くん。お昼一緒に食べよ」

少年は未だ、ホヤ〜としながらも、

「おお、もう昼か？ フワァ〜」

と、伸びをすると、少女に向き直った。未だ、目がぼんやりしている。

「昼飯かぁ、・・・さて今日は何を喰おうか」

「わたし、おべんと作ってきてるんだ。一緒に食べよ」

「俺の分もか？」

少年が、きょんとんとして訊くと、

「うん」

と、少女はにこやかに、そう応えるや、大小の弁当を見せた。

「すまん。じゃあ、屋上にでも行くか。今日は快晴だし」

「うんっ」

少女は、のっそりと立ち上がった少年の後を、弁当を持ってトコトコとついて行った。

穏やかな快晴の下、屋上には昼食をとりに来ている学生たちが、数組ちらばっていた。彼らはあまり人の多くないところを選んで、腰を降ろした。

「今日はちらし寿司なんだよ。美味しく出来てるといいな」

少女はそう言いながら、大きい方の包みを少年に差し出した。

「おう」

と少年は、ぶっきらぼうに包みを受け取ると、それを膝にのせてほどこき始めた。

「はい、お茶」

「ん？ 今日自分で煎れてきたんだな」

「だ、だって、・・・こないだみたいになると、やだから」

「あ、・・・そうだな」

こないだのこととは、前回の間接キス事件にことである。まだ、こたわってるようだ。

お陰で、今回もあまり雑談もせず、淡々と食事をする事となった。

「あ、あのね、それ初めて作ったんだけど・・・味、変じゃないかな」

少女がおずおずと訊いた。

「ん？ 結構美味いぞ」

「そか、よかったあ。博くん何も言ってくれないから、あまり美味しくないのになって、思っちゃた」

「そうか。悪い」

「あ、謝んなくていいんだよ。ちょっと気になってただけだから」

「それにしても、凝ってるな。玉子なんかこんなに薄焼きでもしっかり味ついてるし。蓮根なんか、歯ごたえを残して煮しめるのは結構難しいんだぞ」

「この前、五目稲荷を作ったときに覚えたんだ」

「お前、何でもできるのな。料理とか裁縫とか」

「そんなこと無いよ。博くんは頭いいし、色んな資格や特許も持ってるし。・・・わたしなんか、とろいし、よくこけるし、こんなんで全然つりあわないよ。友達にも、『よく話ができるね』って言われるくらいなもの」

少女は少し悲しげにうつむいているように見えた。

「俺はそんなの気にしてないぞ。生美といくと、落ち着いてゆつくりできるからな」

「そかな？」

「そうだよ。タベも科学雑誌に投稿する論文を精査してて、夜中過

ぎまでかかったし、・・・頭だけよくつても何にもいいこと無いさ」
これは少年の本音だった。小さいころから神童と呼ばれ、物心ついたときには、欧米へ留学して勉学に励み、色々な学位や賞を取った。持っている特許も数多く、特許料と賞金で働かなくても贅沢な暮らしが出来るくらいだ。

彼の両親などは、とつくに仕事をやめて今はマレーシアで悠々自適の生活をしている。

ただ、これだけの實力を持っていると、彼を狙ってくる組織や団体も多い。英語のキャサリン先生は、実はCIAのエージェントである。教頭も陸自の息がかかっているし、彼のマンションなどは、管理人も含めて住人のほとんどが、どこかしらの組織や団体のエージェントである。

そんな中で暮らしていると、毎日が息が詰まる。それを開放してくれるのが、少女と過ごしているこんな時間なのだ。

だが、誰でもいいという訳ではなかった。やはり、この少女でなければならぬのだ。この感情を『恋』と表現するには、少年は未だ幼かったし、未熟でもあった。何せ、『本当』の幼少期を過ごして来れなかったのだから。

「ああ、喰った喰った。ごちそうさまです」

「おそまつさまでしたあ」

「昼飯喰ったら、また眠くなってきたな。・・・おい生美、ひざ貸してくれないか」

「えっ、何？」

「というのを最後まで言わせず、少年は少女の膝枕でもう寝息を立てていた。」

「もう、博くんたら、恥ずかしいよ。・・・周りでいっぱい見てるし。・・・ねえ博くんったらあ」

少女は顔を赤らめて少年から逃れようとしたが、どうしても出来なかった。

（恥ずかしいなあ）

と、思いながら何故か心地よさを感じている。それがどうしてなのかはわからなかったが、少女も少年といるときが、一番ほっとするのである。

（まあいいか。今日もいい天気）

少女は、このまま鐘が鳴るまで、こうしていようと思った。

「生美ちゃん、いい感じじゃない」

「いいな、榊さん」

と、しばらくして、彼女も眠気に誘われかけていたところを現実に戻したのは、友人達であつた。

「あつ、由香里ちゃん、志野さん」

「彼氏に膝枕なんて、この贅沢モノが」

「か、彼氏とかそういうんじゃないんだけど・・・」

少女がしどろもどろになって、言い訳をするが、現実是谁がどう見ても、彼氏彼女である。

「しかし、どうやったら、この美形天才少年と仲良くできるのかねえ？ 教えて欲しいよ」

「えっ、そんな大した事無いよ。前に、勉強教えてもらった時からだし・・・」

「なるほど。確かにそれは妙案だな。こいつに取っちゃ、高校の授業なんか、幼稚園児のお遊び程度だもんね。『ここわかんないんですけどお』なんて言うのは近づく口実にはもってこいだな」

「そんなじゃないよお」

「だって、榊さんだって結構頭いいでしょ。いつも学年10位以内だし」

「そうなんだよねえ。この天然ボケが学年のトップクラスってのが、また、七不思議なんだよねえ」

「じゃあ、由香里ちゃんも勉強教えてもらったら？」

こう言われた友人――大木 由香里は、もつてのほかという態度

で首を横に振った。

「無理無理。だって、こいつおっかなそうなんだもん。難しいこと説明されてもわかんないよお」

「そこは大丈夫だよ、大木さん。彼、教員免許も持ってるそうだし。きつと、丁寧に教えてくれるよ」

「えっ、じゃあ何でこんな田舎の高校なんかに通ってるんだ」

と、由香里は、もう一人の友人の高橋 志野に訊いた。

「息抜きだって」

生美がそう応えた。

「前にNASAで観測してたときに、せっかく新発見をしても、軍事機密になるからって発表させてもらえなかったんだって。それで、嫌になって、NASAを辞めて日本に帰ってきたって言うてたよお」

生美の答えに、二人の友人は絶句してしまった。

「NASAって、うちら平民とはレベルが違いすぎる」

「その前は、アメリカ空軍の要請で無人戦闘機のコンピュータを作ってたんだって」

「戦闘機……。そんな物騒なの作ってないで『ほれ薬』なんて作ってくれたらいいのに」

「由香里ちゃん、そんなの無理だってば」

「ほれ薬なら作れるぞ」

いつの間にか、目を覚ましていた少年が答えた。

「えっ、マジ？」

膝枕のまま少年はこう話した。

「できるぞ。10歳の時に各種動物や昆虫を選択的に誘引するフェロモンの研究開発をしてたからな」

「博くんたらあ」

「いいじゃん、生美。作って作って！ あたしそれ欲しい。逆ハイレムよ、逆ハイレム」

「そんなわり、不細工もよってくるぞ。それでもいいなら作ってやる」

「うん。それは考え物ね。・・・ちよつと考えさせて」

少女達の雑談の中、少年の至福の時間に終わりを告げたのは、予鈴の鐘ではなく、次の言葉だった。

「おい、阿久津。また女に囲まれてちゃらちゃらしやがつて。」

3年の近藤であつた。彼はこの辺の不良どもを仕切っている番長でもあつた。

「お前、こないだ俺のダチに痛い目見せたんだつてな。」

少年は起き上がって大きく伸びをすると、

「何だ？　もしかして、脱臼治してやったことかあ？」

「そうだよ。稀代の大天才様はそんな些細なコトまで覚えてくれて助かるぜ」

「あいつ、ちゃんと治つてたろう。まったく、折れてもいなくせに、大げさに言いがかりをつけてくるからだ」

「おう、その辺はちゃんと言い聞かせた。でもなあ、そんなわり、あれがトラウマになってなあ、すっかり意気地なしになっちまった・・・この落とし前をつけさせてもらうぜ」

「で、どうするって言うんだ？」

と、少年は立ち上がって訊いた。

「博くんやめなよ。怪我なんかしたらいへんだよ」

「そうだよ、阿久津。あいつ3年の近藤だよ。この辺りのトップだ」
少女達は何とかこの小競り合いを納めようとしていたが、少年はぶっきらぼうにこう言っただけだった。

「やりたいなら、やれば。後悔することになると思うけどさ」

これは、近藤の怒りを誘うだけだった。

「やろう、叩きのめしてやる」

近藤が力任せに殴りかかっていた。

「キャー」

少女達は、悲鳴を上げるだけで、どうすることもできなかった。
少年はなすがままに、殴られようとしたとき、不可視の何かが、

近藤の拳をさえぎった。のみならず、少年の影が不自然な形態をとると、近藤の足元に絡まり、そこから黒い影のようなものが這い登っていった。

「うわっ。何だこりゃ。てめえ何しやがった」

「特に何も。あんたが俺に敵対行動を取ったから、防御システムが自動的に反応したまでさ」

少年は悪魔のような笑みを浮かべてそう言った。

「何だよ、これは。きしょく悪いぞ。てめえ何とかしろ」

「そいつは、極小のマイクロマシンの集合体だ。お前の体に取り付いて、ある種のフェロモンを発生する」

「な、なんだよ。そのフェラ何とかって」

「教えて欲しいか？　ん、訊かないほうがいいと思うぞ。ま、訊いても訊かなくても無駄だな」

少年がそう言っているうちに、なにやらカサカサという音やブーンという音が聞こえ始めた。

「うわっ、何だこりゃ！」

近藤の体は、数匹のハエとゴキブリにまといつかれていた。それが、あつという間に数を増し、体を覆いつくそうとしている。

「ヒヒヒ、フハハハハ。笑えるなあ、番長さんよお。たかが虫けらが怖いなんて。そいつは、ハエとゴキブリを強力に誘引するフェロモンをお前の体表面の老廃物から生成して、高濃度で発散させてるんだ。あんたには、お似合いのオトモダチだぜ」

「うわっ、気持ち悪い。おい、助けてくれ。何とかしてくれ！」

さすがの近藤も、脅しても殴っても効果が無いものには対処しきれないようだ。かといって、身体に取り付いたものを叩けば、それらはつぶれ不快な汁と化する。

「があ、服の中にも入ってきた。俺が悪かったから、何とかしてくれよ」

懇願する近藤に少年は無慈悲な言葉を投げつける。

「おまえ、番長なんだろ。だったら、その得意の拳でぶん殴ってや

りやあいいじゃないか」

「そんな事言わずに。誰か助けてくれ」

近藤はそういいながら助けを求めて近くの学生に近づくが、皆その気持ち悪さに遠のくばかりだった。

「博くん、もういいでしょう。スイッチ切ってあげなよ」

「残念だが、あれはあらかじめ組み込まれた動作をするしかできないオートマトンだ。コントローラーはないね（↑嘘）」

近藤は半ばパニックになりながら屋上を駆け回った挙句、明り取りの出っ張りに足を引っ掛けて転ぶと、動かなくなった。

「あ、大変、保健室に連れてかないと」

「だ、誰が？ あたし、あんな気持ち悪いの触るところか近寄ることもできないよ」

「わたしも」

「僕もだ」

学生達は、何とかしてやりたいとは思っても、そのあまりの不気味さゆえに遠巻きに見守るだけだった。騒ぎを聞きつけてやってきた教諭達もあまりの事に啞然としていた。

「博くん、あれじゃひど過ぎるよ」

「俺の至福の時間を邪魔した罰だ」

「博くん！ ヤ・リ・ス・ギ。助けてあげないんだったら、もう膝枕なんかしてあげない！」

「ええ、そりゃ無いだろう。だって、向こうから因縁つけてきたんだし」

「ヒ・ロ・シ・くん！」

少女のあまりの剣幕に、ようやく少年はおれた。

「おい、だれかバケツに水汲んで来い」

「お、おう。わかった」

しばらくして水が届くと、少年はポケットから小さなカプセルを取り出すと、中味をバケツの水に入れてかき混ぜた。

「こいつをぶっ掛けておきゃ、2時間くらいでおさまるよ」

「博くんが掛けてあげなさい」

「何でそこまで俺がやらなあならんのだ、生美」

「博くんのせいでしょ」

「もう、しょうがないなあ。わかったよ。俺がやるよ」

そう言つて、少年はバケツをひっさげて虫まみれの近藤に近づくと、バケツの水を無造作に引つ掛けた。

「これでいいだろ」

「もう、すぐにやりすぎるんだからあ」

少女に睨まれると、

「わかったよ、悪かったよ」

と、少女に謝った。

（何で俺が謝らないとならないんだ？）

と、腑に落ちないでいると、本鈴がなった。

「さあ、皆授業だぞ。教室に戻るんだ」

教師達が学生を帰らせていた。

近藤はいえば、やっと駆けつけてきた保険医と数人の教諭に、遠巻きに囲まれていた。

「だいじょうぶだよ、生美。さつき水ぶっ掛けるときに、スキャンしておいた。ただの脳震盪だよ」

「ホントに、だいじょうぶなの？」

何度も確かめる少女に、頭を下げながら、少年達も他の学生に続いて、教室に戻った。

こうして、この日も平和に暮れ、人類はその滅亡までのタイムリミットを更に一日伸ばすことができたのだ。

第三章 天才はメイド様が好き？

ザワザワザワ、朝の学校は喧騒にまみれている。ザワザワザワ。少年は、いつもよりも少し遅れて校門をくぐった。

その時、少女はクラスメイトと雑談をしていた。

「・・・へえーそうなんだ」

「でもねえ、家、弟が猫アレルギーだから飼えなくってさ、知り合いに引き取ってもらったんだ」

「猫っていいよねえ。ふわふわしてて」

「それよりさあ、榊さんって、彼氏とどこまで進んでるの？」

友人の一人が聞いてきた。少女はきょとんとして、こっぴどい。

「彼氏って？ 誰の事？」

「とぼけなさんな。あの美形天才少年のコトだよ」

「博くんの事？」

「当たり前じゃない。あんなにいつも一緒にいたら、そう思わない方が変じゃん」

「そかなあ？ 別段彼氏とか思ったことないし、お付き合いしてるってこともないんだけど・・・」

少女は少し赤くなつて、うつむきながらこっぴどい。

「それに、告白もしてないし・・・されてないし・・・なんていうか、その・・・側にいるとほっとするって言つか、いごこちいいってゆーか・・・それだけなんだけど・・・」

「ええー！ それじゃあキスとかも未だしてないとか」

「やだあ、そんなのできないよお。は、恥ずかしいし・・・」

「生美ちゃん、そんなんじやダメだよ。無愛想なところさえなければ、あんな美形男子、勿体無いじゃない」

「それに、あいつんとこ、すげえー金持ちらしいじゃない」

「うん、何か特許とかがいっぱいあって、ライセンス料だけで暮らしてけるんだって」

「マジで！ スゲーじゃん。玉の輿だよ！ 絶対逃がしたらダメなんだから」

「でもさ、・・・付き合うとかって、何かよくわかんないし・・・」
少女は更に赤くなつてうつむいてしまった。

「榊さん、そんなこと言ってたら、他の娘に取られちゃうよ」

「そんなコト言われたってさ、わたし、ドジだし、とろいし、何にも無いところでコケたりするし・・・顔だって十人並みだし。いいとこないし、・・・つりあわないよ」

「そんなことないよ。生実ちゃん可愛いよ」

「だいたいそのひつつめ髪がいけないんだな。ほれほれ、オネエサンがキレイにしてあげるから」

そう言いながら、クラスメイト達は少女の三編みをほどこにかかった。

「やだよー、髪なんてこのままでいいよー」

「まあ、そうおっしゃらずに」

とうとう、少女の髪は、ほどかれてしまった。

「生実ちゃん、ちよつと顔あげて。・・・うゝんナチュラルウェーブのロング。このままでっも結構可愛いんだけどなあ。ちよつといじった方がいいかな」

そう言つと、友人は、少女の髪を頭の後ろでたばねてみた。

「ポニーテールねえ。・・・なかなか似合ってるけど、もうちよつとインパクトが欲しいいね」

「じゃ、これは？」

そう言つと、今度は髪を二つに分けて頭の左右でにぎつた。

「ツインテかあ。・・・ちよつと元気っぽ過ぎない？」

「んー、じゃあこれは？」

少女は友人達に翻弄されていた。

少年が教室のドアをくぐった時、少女達はまだ固まって騒いでいた。

（何やってるんだ？）

「あつ、彼氏登場」

「彼氏だ」

「彼氏ー」

（彼氏って何だ？）

少年は手招きされるままに人垣へ向かった。

「じゃじゃーん、こんなできました」

と言われると同時に人垣が開かれた。

（何だ？・・・そう言えば生実がいないな）

「ほら、榊さん、顔あげて」

「うう、やだよお、恥ずかしいよお」

（え？ 生実の席にいるのはだれだ？）

少年が怪訝に思っている時に、目の前の席に座っていた少女が顔をあげた。

「ひ、博くん、・・・変じゃないかな」

「い、生美なのか？」

少年はそのまま少女に見とれてしまった。

（可愛い・・・）

「今日は時間も押していたので、シンプルにポニテにしてみました
あ」

「どう？ 可愛くなったでしょう。惚れ直した？」

「・・・う、うん」

（知らなかった。女の子というのは髪型だけでこうも変わるのか・・・）

少年はショックのあまり、その場に棒立ちになっていた。

「さあさ、もっと近くで見なよ」

「いいのか？」

「やだあ、恥ずかしいよ」

「えっ、ダメなのか」

少女は赤面してうつむいてしまった。少年は少し近くによると、マジマジと、少女を見ていた。

「阿久津君、感想は？」

「えっ……、か、可愛い……」

「でしょ、でしょ。やっぱ、シンプルにポニテでまとめたのは、正解だったね」

「……ポニテって何だ？」

「ポニーテール。この髪型の名前だよ」

「髪型に名前なんてあるのか？」

「ほほう、稀代の大天才くんにも苦手分野があったか」

少年は、幼少期を海外ですごし、生活のほとんどを研究に費やしていたので、このような日常文化には不得意が多かった。

「あのなあ阿久津くん、女の子は、髪型のほかに着る服やアクセサリで、すごく変わっちゃうんだぞ。その辺は、彼氏としても少し知っておいたほうがいいんじゃないか」

少年はうなずくと、もう一度少女をマジマジと眺めた。

（か、可愛い）

「どうしたら、髪型とか服装とかわかるんだ？ 教えてくれ」

少年はまじめな顔で、訊いた。

「え？ どうしたらいいって、あたしは、その辺のファッション雑誌みたり、ヘアサロンで聞いたりしてるけど」

「最近は、インターネットでも髪型とか洋服のアレンジとかができるサイトがあるよ」

少年は、生真面目にそれをメモすると、

「よし、今日はサボりだ」

そう言って、自分の席に鞆だけ置いてそそくさと教室を出て行ってしまった。

「何あれ？」

「うゝん、天才のやることは凡人にはわからんわ」

そこへ、今もうつむいている少女が割り込んだ。

「もういいかなあ。いつもの髪型に戻したいんだけど・・・」

「ダメ！ 今日是一日それだからねえ」

「ひゝん、そんなあ」

少女は恥ずかしさでいっぱいになっていた。

午前の間、少年は戻ってこなかった。

「んゝ、阿久津は休みかあ？」

「先生、阿久津くんはサボりでゝす」

「そうか、サボリね。まあいいか。あんなやつの前で授業やってると、どこでかで間違いを指摘されそうで、肩こるからな。今日はリラックスして授業がやれるよ」

「あははははは」

「よし、授業始めるぞ。んゝと、・・・お、やけに美人がいるなと思ったら、榊か。よし、教科書52ページの英文を読んでくれ」

「は、はい」

少女は立ち上がると、教科書を読み始めた。

少年が戻ってきたのは、午後の授業が終わってしばらくしてだった。

「あ、彼氏生還」

「彼氏だゝ」

「生美ちゃん、彼氏帰ってきたよゝ」

二人は目が合うと、お互い顔を赤くしてうつむいてしまった。

「阿久津、お前授業サボって何してたんだよお」

近くにいた、男子生徒が声を掛けた。

「ん？ ああ、情報収集だ。この俺にわからないことがあるなんて許されないからな」

「何だそりゃ」

少年は、生美を中心とした少女達に近づくと、こう宣言した。

「俺は女性のファッションを制覇したぞ！」

「何それ、ちょーキモいんですけど」

少女達の一人が応えた。

対して少年は、その女生徒を指差すと、

「ボブカット」

と指摘した。

「あ、あつてるけど」

それから、他の女生徒を指差し、髪型を指摘していった。

「もしかして、授業サボってそんなこと調べていたの？」

「その通り。もうこの俺にファッションセンスが無いとは言わせん」

「はぁ・・・」

少年は更にこう続けた。

「服のほうも極めたぞ。ブレザー、セーラー服、メイド、ゴスロリ、猫耳、コスプレ・・・、どうだ参ったか」

「あのう、それちょっと方向が間違っているんですけど」

「え？ 違うのか。東京で流行つてると出ていたぞ」

「それは、一部地域だけなんですけど」

少年のプライドは、その言葉に再び打ち砕かれた。

「そ、そうだったのか。もっと根本的なところから調べねばならんようだな。・・・よし、今日はもう帰るぞ、生美」

「は、はい」

いきなり言われた少女は、おたおたしながらも変える準備を始めた。

こうして、二人は学校を後にし、家路についた。

少年と少女は並んで歩いていた。どちらも、時々、相手をチラ見しながらである。

（生美のポニーテール、可愛いな。俺が色々憶えてもっと可愛くしてやるからな）

（うつつ、恥ずかしいなあ。博くん何にも言ってくれないし、やっぱり似合っていないのかなあ。明日はいつもの三編にしよう）

と、突然、少年は少女に声を掛けた。

「なあ、生美。ちょっとそこの公園に寄ってかないか」

「え？ いいけど、何？」

「あ、ああ、ちょっと実験したいことがあって」

それだけ言って、少年は黙ってしまった。少し顔が赤くなってる。

二人は公園のベンチで、しばしの休息を取っていた。

先に声を掛けたのは少年だった。

「あのなあ、ちょっと頼み事があるんだけど、・・・いいかなあ」

「えっ、なあに。わたしでできる事なんだったらいいけど」

少年は鞆の中から、スティック状の物を取り出しながら、

「実は、これは授業をサボって作ったものなんだが、これを・・・

少年の頼み事は、次の罵声でさえぎられた。

「あ、いたぞ。阿久津だ！」

「阿久津だ。今日こそはただじゃおかないぞ！」

やってきたのは、いつもの不良少年達である。

「おまえらなあ、いつもいいところで邪魔しに来て、ウザイんだよ。お願いだから、ケンカでもナンパでも、よそ行ってやれよ」

少年は本心からそう言った。

「うるせえ、おまえにはいくつも借りがあるんだ。今度こそ痛い目みせてやる」

「俺には貸した覚えはねえ。とつと、どつかへ行つちまえ」

「おまえのおかげで、こつちの面子が丸つぶれなんだよ。今日こそはにがさねえからな」

少年は、不良達に対して、強い嫌悪感を持ってこう言った。

「生美を可愛くしようと思って作つたが、最初の実験はお前達ですることにしよう」

「何だつ、また卑怯な手でくるのか」

「そうだ、卑怯者め」

「数を頼りにやってくるおまえらに、卑怯者呼ばわりされたくないわ！ お前らにはこれをくれてやる」

少年はそう言つと、ステッキ状のものを不良達に向かって大きく振つた。すると、ステッキの先端から金色の微粒子がばら撒かれ、不良達に降りかかった。

しばらくすると、不良たちの服は光輝きだし変形を始めた。

「はははあ、そのマイクログラムシンは、洋服の繊維や空中の元素を取り込んで、あらかじめプログラムされた服にドレスアップするように仕込んである。もっとも、おまえらに似合う服などありはしないがな」

「何じゃあ、こりゃ。くそつ、いつもの卑怯な手だな！」

しばらくすると、不良達の服は、メイド服になっていた。

「あははは、こりゃお笑いだ。その恰好で、近くの茶店にでも雇ってもらうんだな」

「兄きい、こんな格好恥ずかしくてやつてられませんよ」

不良たちは真つ赤になつて怒り狂つていた。だが、この恰好でケンカしているところを見られるのも恥ずかしい。

「ちきしょう、今度あつたらただじゃおかないぞ。てめえら一旦引くぞ」

不良たちの撃退に成功した少年は、改めて少女に実験の申し出をしようとしていた。

「それでなあ、生美、俺の頼みというのは、これを使って・・・」

「ひ、博くん、わたしにあんな恰好をさせようとしたの？」

「うゝん、単刀直入に言うと、そうなんだけど・・・。だめかな？」
「ダメ」

「えゝ、どうしてだよ、生美なら絶対似合うと思うぞ」

少年もむきになって、説明する。

「絶対ダメ。・・・だって、恥ずかしいじゃない」

（もうちよつとおとなしい服だったら、OKしてあげたのに、博くんのバカ）

「ちよつとだけだから、お願いします、生美様」

「ダメダメ、絶対ダメ。博くんのヘンタイ、オタク」

「そんなこといわずにさあ」

「ダメったらダメ」

「ちよつとだけだから」

そんなこんなで、今日も少年の才能は無駄に消費され、人類はその滅亡へのタイムリミットを一日延ばすことになったのだった。

第四章 初デート

その日、少年はいつもより少し遅い朝食を摂っていた。今日は休日である。

少女との約束の時間までには1時間の余裕があった。今日は二人でショッピングをすることになっていた。

朝食の後片付けを終えると、少年は身だしなみを整え、出発の準備を始めた。

待合せの場所に着いたとき、少女は未だ来ていなかった。約束の時間まで未だ10分ある。少年は、自販機で缶コーヒートを買つと、近くのベンチに座った。

休日に二人だけで、過ごすのは初めてである。少年はやや緊張した心持で、少女が現れるのを待っていた。

（今日はどこへ行くのか。別段計画も無いから、生美に合わせよう。天気予報では、夕方から小雨だから、帰りは少し早い時間がいいだろう）

少年は、念のために持ってきた折りたたみ傘が鞆にあるのを確認すると、ベンチの背もたれに身をあずけた。

少女は5分ほど送れて待合せ場所に到着した。走ってきたらしく息が上がっている。

「ご、ごめんねえ。仕度してたら時間がかっちゃって」

「ああ、俺もさっき来たところだ。・・・今日は三編じゃないんだな。ツーサイドアップか」

「ごめんね、結ってる暇がなくなっちゃって。・・・へ、変じゃないかな？」

「いや、すごく似合ってる。可愛いよ」

「へへへ、よかったあ。ごめんね、ちょっといつぶくさせて。遅れると思って、走って来ちゃったから」

「別にいいよ。・・・座るか？」

「うん、ありがと」

そう言つと、少女は少年の隣に腰掛けた。

「博くん、いつもの学ランじゃなくて、ブレザーだから、何か大人っぽいね。・・・か、恰好いいよ」

「そうか？　ありがとう。生美もその服すごく似合ってるよ」

少年はいつに無くにこやかにそう応えた。

（緊張を緩和するナノマシンを打つといてよかった。あんまり可愛いから、俺、ちょっと変になりかけてた）

「それじゃあ、そろそろ行くか」

「うん」

少年と少女は連れ立ってベンチを後にした。

「どこへ行くのか？　お昼には未だ早いから、買い物かな」

「そだね。ずいぶん寒くなったから、冬物をもう少し買い足したいんだ」

「服屋かあ、この辺にいい所があつたかなあ？」

「あつちのショッピングモールに、色々なお店があるんだ。それでもいいかなあ？」

「よし、じゃあそうしよう」

「うん、ありがと」

二人は、ショッピングモールへと歩き始めた。

登下校以外で、二人だけで並んで歩くのは初めてである。

級友からは彼氏彼女と呼ばれるが、今日のような本格的なデートは初めてであつた。それゆえ、少女はかなり緊張していた。

（周りからはどう見えているのかな。わたし、博くんとちゃんとつりあつてるかなあ。で、でも、きよ、今日はがんばらなくっちゃ。

由美子ちゃんの言うとおり、勝負パンツじゃなきゃダメだったかなあ)

少女は今日、ある決心をしてきていた。それも緊張の原因であった。

実は少年も少女と同じ事を考えていた。

(問題はタイミングだ。シミュレーションでは99%の成功率だったし、今日はナノマシンで緊張を抑えてある。おい俺、勝負どころだぞ。ガンバレ俺)

二人は仲良くウィンドウを見ながら歩いていた。

「あ、あの服、可愛い」

「どれだ？」

「あの左端のやつ」

「そうか、ちよつと入ってみようか」

「いいのかなあ」

「いいに決まってるだろう」

二人は、店に入ってしまった。少年はこんな店に入るのは初めてだった。少女も父兄同伴以外では入ったことは無い。

洋服を物色している少女を少年は目を細めて眺めていた。

「博くん、こんなのどうかなあ」

少女は水色のワンピースに、白のカーディガンを合わせたものを手にしていた。

「どれどれ？ いいかも知れないな。試着してみたら」

「でも、いいのかなあ。冬着にしては少し薄でだし、値段も結構高いから・・・」

「大丈夫だよ、行っておいで」

「じゃあ、ちよつと待っててね」

そう言つと少女は服を手に、試着室に入ってしまった。

「おまたせえ。どかな、これ」

試着室の鏡の前で、少女はくるりと回って見せた。カーディガンのすそがふわりと舞い上がる。

「うん、いいんじゃないかな。似合ってるよ」

「そか、ありがと。・・・でもなあ、ちよつと高いし、今日は試着だけにしとこう」

「買わないのか？」

「うん。ちよつと予算オーバーなんだ、へへ」

「そうなんだ、折角よく似合ってるのに」

「いーの。着替えるから、もうちよつと待っててね」

と言い、少女は試着室のカーテンをとじた。

それから二人は、色々見立てながら、店の中を回って歩いた。

「これなんかどかな。おそろいのセーター」

「うん、暖かそうだね」

「値段も手ごろだし、これにしようかな」

「いいんじゃないかな」

少年は二着のセーターを受け取ると、レジのある方へ向かおうとしていた。

「あ、わたしも払うよ。一つはわたしのだし」

「いいの。少しは恰好いいことをさせてくれないかな」

「うん、・・・じゃ、今日は甘えとくね。そのうちどっかで埋め合わせるね」

「じゃあ、しばらくその辺で待ってて」

「うん、わかった」

少年は少女を後にしてレジへ向かった。

しばらくして、少年は紙袋を持って返ってきた。

「今、何時かな？ 服みてたら結構時間掛かったよね」

「んとな、一時過ぎくらいだよ。何かお腹空いてきたよな気がするね」

「そうだな。でも、これくらいの時間帯の方が混まないからいいかもしれないね」

「そか、じゃあ次はなんか食べにいくのか」

「何食べたい？」

「そだねえ、パスタかな。どお」

「成る程、パスタか。あっちに美味しいところがあるそうだから行ってみようか」

「うんつ。行こ行こ」

二人は連れだって、レストラン街へ向かった。

目的の店はレストラン街の中央にあった。案の定、客はもう引け時で、あまり、待たずに席に座ることができた。

二人はメニューを見ながら何を食べようかと選んでいた。

「生実は何にする？」

「わたし、カルボナーラにしようかな」

「じゃあ俺はこのキノコと海鮮のパスタにしよう」

店員にオーダーを告げると、しばらくして注文の品が運ばれてきた。

「お、なかなか美味そうだな」

「ほんとだね」

「いつもの弁当も美味いけど、たまにはこんな昼食もいいな」

「そだね」

二人は他愛のない雑談をしながら、食事をしていた。

「ああ、喰った喰った」

「わたしも、お腹一杯」

「さて、これからどうする？　夕方くらいから雨になりそうだから、

あんまり時間のかかることはできないけど」

「そか、お天気のこととか全然考えてなかったよ」

二人は会計を済ますと、街路へ出た。

なるほど、店に入るときは晴れていた空が、雲でおおわれていた。

「うーん、この空模様じゃ、そろそろ帰り時かな？」

「そだね。でも残念だな。もっと博くんと遊びたかったな」

「俺もそうだよ、生実」

そう言いながら二人は、帰り道を歩いて行った。

「生実、ちょっとそこの公園に寄ってもいいかな？」

「いいけど、何？」

「ん？ 未だ服屋とかで買ったものを分けてなかっただろう」

「あ、そか。わたし、すっかり忘れてたよ」

二人は、公園に入ると、手近なベンチへ腰かけた。

「紙袋をよけいにもらってたんだ。俺のは数が少ないから、こっちに入れようと思う」

「色々買ったよね。でも、博くんがほとんど払ってくれて、なんか悪いなあ」

「いいんだよ。俺が買ってやりたかったんだから」

「あれ、この包みて何？ わたし、覚えてないんだけど」

「あ、これか。今日試着したワンピースとカーディガンだよ。よく似合ってたから、買った」

そう言って少年は少女に包みの中を見せた。

「そんなのよかったのに。高かったでしょう」

「お前も知ってるだろう、俺んち金持ちなの。それに、俺も生実の着てるところをもっと見たかったから」

「ごめんね。ありがとう、大事にするね」

「もっと欲を言えば、着るのは俺の前でだけにしたいとか・・・なんちゃって」

少年は少し赤くなって、そう答えた。

「うん、わかった、ほんとにありがとね」

「それと、俺ちよつと生実言っておきたいことがあって・・・」

「あ、わたしも、博くんに聞いてもらいたいことがあったんだ」

双方とも赤くなりながら、同じようなことを言っていた。

「じゃあ、生実が先でいいよ」

「あ、うんと、博くんが先でいいよ」

「そ、そうか。なら俺から」

（くそ、ナノマシンが効いているはずなのに、すごく緊張してきた）

「あ、あのな、俺、生実のこと、・・・ずっと前から、す、好きだったんだ。俺なんかでよかったら、付き合ってくれないかな？」

（あああ、言ってしまった。生実はどう答えるんだろう）

「わ、わたしも博くんのことが、好き。・・・でもわたしなんかでいいのかな？ わたし、ドジだし、とろいし、・・・博くんとは、つりあってないかもしれないし。・・・でも好きなの。それでも付き合ってくれる？」

「何言ってるんだよ、生実は可愛くて、いつも側に居てくれて、それで気持ちが悪く落着くってゆうか、安心してられんだ。他の女の子じゃ駄目なんだ」

「わたしも博くんが側にいるとほっとするの」

「生実」

「博くん・・・」

少年は少女の肩をつかむと、ゆっくり引き寄せた。少女もそれを拒みはしなかった。二人の顔が間近に迫り、互いの唇が触れるまであと少しと言うところで、

「ダメ」

と言って、少女が拒んで少年を突き放した。

「な、何でなんだ。やっぱり俺のことは・・・」

「ち、違うの。・・・あれ」

そう言う少女は公園の木の密生しているところを指差した。そ

ここにいたのは、いつも因縁をつけてくる不良集団であった。

「お、お前らぁ。そんなところで、何してるんだよ」

「あ、見付かつちった」

「今、すごくいいところだったんだぞ。あとほんの少しだったんだぞ！」

少年は半分泣きながら、不良達に訴えた。

「ああ、俺達のことには気にせず、続きをどうぞ」

「そんなことできるかよ。折角いい雰囲気だったのに、ぶち壊しだよ。どうしてくれるんだよ」

「どうしてって・・・なぁ」

「そうだよなぁ・・・」

「・・・も、もう許さないぞ。今日は、本気でお仕置きしてやるから、かかってこい！」

「そう言われたってなぁ、今さらしょうがないだろう」

「俺達も、もうこれで引き揚げるから、貸し借りなしってことで、不良達も少しは責任を感じているのか、今回は及び腰であった。」

「そっちが出てこないんなら、こっちからいくぞ！」

そう言つと少年の足下から、黒い影の塊が、不良達に向かって這っていった。

「うわ、な、何だこりゃ」

怪訝な顔をする不良達に、黒い塊は飛び付くと、服の中に入り込み、皮下へ潜り込んでいたった。

しばらくすると、不良達は全身を掻きむしりながら、その場で、七転八倒していた。

「クハハハ、それは特殊なナノマシンマテリアルで、皮下に潜り込むと、痒み物質であるヒスタミンを生産・分泌し続けるのだ。ナノマシンが体内の細胞と同化してヒスタミンの分泌が終わるのは明日の朝だ。それまで、全身の痒みと戦うんだな」

少女はというと、ベンチの影で真っ赤になっていた。

「ごめんよ、もっと違った場所を選んでおけばよかった」

「・・・うん」

「あれ、生実、今日は怒らないだな？」

「だって、わたしだって怒ることあるもん。こんな恥ずかしいの、もう二度とできないよ」

「俺に幻滅した？」

「ううん」

「付き合っつてこともダメなんのかなあ」

「そんなことないよ。むしろわたしにはもったいないくらいだよ。ほんとにわたしでいいの？」

「当たり前だろう。でなきゃ、緊張を緩和させるナノマシンを服用してまで今日に臨まないよ」

そう言つと少年は、かがみこんでベンチに座っている少女を抱き止めた。

「こっから先は、誰も邪魔しないところでね」

「ん、ありがと」

そう言つと少女も少年を抱き締めた。

いつのまにか、細かい雨が二人を濡らしていたが、少年も少女も気にはしていなかった。

「明日からわたしたち彼氏彼女なんだね」

「そうだよ」

小雨はいつまでも二人を濡らしていた。

しばらくすると、二人は、少年の持つてきた傘の中にいた。

少女は、少年の片腕にすぎるように寄り添っていた。少年も少女も何もしゃべらなかつたが、二人はの心は暖かい雰囲気包まれていた。

そうして、人類はその滅亡までのタイムリミットを一日分延ばすこ

とができたのだ。

第五章　つかずはなれず

その時、少年は少女を待っていた。少女に密かにつけた発信器の情報では、あと2分後には接触するはずである。もちろん少女はその事は知らない。偶然を装って、一緒に登校するためである。

程なくして、道の向こうから少女が歩いてくるのが見えた。こちらを見つけて手を振っている。

「おはよ、博くん」

「おはよう。一緒に登校するなんて、滅多にないね」

「そだね。すごい、偶然」

「そうだね、すごい偶然だね（↑嘘）」

二人はそのまま並んで学校までの道を歩いていた。少女が昨日よりも近くを歩いているように少年は覚えた。もう俺たちは彼氏と彼女なんだと思うと、このまま学校なんか行かずに、少女をつれてどこかに行ってしまういたい気分になる。

それも長くは続かない。程なく二人は学校の門をくぐり、校舎に入り、教室の扉をくぐることになる。そして授業という、つかの間の別れを経なければならぬのだ。

「おはよ」

「おはよ」

級友達が授業前の雑談をする中で、二人は別れ、それぞれの席についた。

「おい阿久津、朝っぱらから彼女連れなんて、いい身分だな」

「そうかあ」

「当たり前だろう。それより紹介しろよ、今朝連れてた娘」

「紹介も何も、あそこにいるじゃないか」

少年は、少女の席を指差した。

「えー、あれ榊だったのか！ やべえよ、俺完全にノーマークだったよ。髪型変えただけなのに、すげえ変わるな」

級友には、少年の横を歩いていたのが、少女だとは気づかなかったのである。

「元々は、顔立ちが整ってたんだなあ。オレ、アプローチしてみようかな」

「ダメだ。あれは俺のだ。手を出したら、いくらお前でも許さん」

『許さん』の部分は、少年の語気も荒く、本気であることを物語っていた。

「じよ、冗談だよ、冗談。お前に逆らったらどんな目に合わされるかわかったもんじゃないからな。いくらオレでも、3年の近藤の二の舞にはなりたくないからな」

「わかってるんならよろしい」

「いつく〜みちゃん、おつはよろう。彼氏とは上手く行ってる？」

「あ、由香里ちゃん、おはよ」

「今日は並んで登校してたよね。いい感じじゃない」

「それより、昨日はどうだった？ 上手く行っただの。ねえねえ、聞かせてよ」

根掘り葉掘り聞き出そうとする友人達に、少女は恥ずかしげにモジモジしていた。

「上手く行っただてえゆーか、いかなかったたてゆーか・・・、ほどほどとゆーか・・・」

「なあ〜によ。はつきりしないわねえ」

「今日、髪型変えてきたよね。彼氏のお好みとか」

「え、えとー、別にそうゆーわけじゃないんだけど。に、似合って

るって言われたから・・・」

「えー、言うじゃん言うじゃん。それから、それから？」

「榊さん、昨日の成果を話してよ。ちゃんと告白した？」

「こ、告白したてえゅーか、されたってゅーか・・・」

「やるじゃん！ それからどーなったの？ せめてキスくらいまでは行つとかないと」

「ダ、ダメだよ。キスはまだ早いよ」

「・・・ん、この娘はあ。ホンットにネンネなんだからあ」

「阿久津も阿久津だよ。こーゆーところは、男がリードしてあげなけりゃならんのに！」

「ひ、博くんのせいじゃないんだよ。・・・だ、だって恥ずかしいし、・・・皆見てたし」

「誰よ、そんなのぞきみたいなことやってんのは？」

「い、いつもの、男の子達」

「かー、あんの不良達、こんな時までついていくかあ」

「で、でも、わたしも、が、頑張ったんだよ。あと1センチくらいまで・・・」

「そこまでいったんなら、最後まで行くでしょ、普通」

「そんなコト言ったって、無理だよ、何人も見てたんだよ。もう恥ずかしくて、キスなんてできないよう」

少女は耳まで真っ赤になった顔を、両手で隠していた。

「あー、ゴメンゴメン、泣かなくていいんだよ。悪いのはあの不良達なんだから」

「そうそう。それにそこまで行っちゃったことは、告白は成功したんだよね」

「・・・うん、とりあえず」

「それじゃ、大丈夫だよ、生美ちゃん。ああ見えて、阿久津のやつ、一本通ってるからね。あのキャサリン先生のセクシー攻撃にもなびかなかったくらいだから」

「ま、今回はしょうがないか。また今度頑張ってみよう」

「また今度なんて考えられないよう」

「まーまー、そんなに深刻ならずに。ここはオネエサンたちが何とかしたげるから」

「何とかって？」

「大丈夫、大丈夫、ちゃんと策は練ってあるから」

少女は一抹の不安を感じたが、それも、予鈴でかき消されてしまった。

昼休み、二人は中庭のベンチで昼食をとっていた。今日はサンドイッチとダージリンである。

「隊長、あまり話が盛り上がって無いようであります」

教室の窓から少女の友人たちが、監視していた。

「生美ちゃん、お弁当の箱を真ん中に置いたら離れちゃうじゃない。膝の上に置いて、もっと接近しなくちゃ」

「んー、イライラするわねえ」

「隊長、何か、通り過ぎる男たちが、二人を見てくようなんですけど」

「生美ちゃん可愛くなったからねえ。天才君、早くモノにしちゃわないと、他の男に取られちゃうぞ」

「あ、天才君のほっぺにマヨ発見。生美嬢、これを拭き取ってあげました」

「おー、それは点数高いぞ」

「隊長、さっきよりラブラブ度が上がった模様」

「やるわねえ。よし、皆のもの、今週末にプランOPを発動する」

「プランOPでありますか？」

「そうだ！ 皆のものの準備に取りかかるぞ」

「おー」

こうして、昼休みを終え、放課後を迎えた。

少年と少女は、並んで下校していた。昨日お互いに告白したことで、どうしても

相手を意識してしまう。

（手をつないだ方がいいのかなあ。さすがに腕組むのは恥ずかしいし・・・どうしよう）

少女は悩む中、少年も悩んでいた。

（何かもつとこう近づきたいけど、昨日の今日だからなあ。さすがにキスしたいなんて言えっこないよな）

結局何も言えず、黙々と歩いていくだけだった。

もうすぐ分かれ道というところで、ふと見ると、いつもの不良達がたむろしていた。

（いったい、今度は何の用なんだよ）

少年は、彼らにウンザリしていた。

「あ、阿久津う、今日こそは決着を付けてやる！」

（はあ、逆恨みの繰り返しじゃないか。もつと頭使ったこと出来んかなあ）

そう思いながら、少女を後ろにかばい、少し前へでた。

「決着か。俺もいい加減にして欲しいよ。どうしたら決着なんだ？」

少年の言葉を聞いたのかどうか、凶器を振り回しながら、彼らは突進してきた。

少年は、学ランに擬態した防護スーツをバトルモードにしようとしていた。

と、突然、突風が彼らを襲った。

「キャン」

と、後ろで少女の声がした。

不良達も一種動きが止まる。

回りの挙動に、不審なモノを感じて、少年が恐る恐る振り返ってみると、少女は真っ赤な顔をしてスカートを両手でおさえていた。

少年は、もう一度不良達を見た。ついさっきまで殺気だっていたのが、何故か気まずそうにしている。

「お、お前達、まさか・・・見いゝたゝのかぁ」

少年は怨嗟の混じった声で訊いた。

「いや、ちよっとだけだから。なぁ」

「そう、ちよっとだけ、白っぽいのが」

（と言う事はやはり）

もう一度少女の方を振り返ると、半べその少女が真っ赤になって「クンとうなずいた。

「やっぱり見たんだなぁ」

「い、いや・・・ゆーほど見えてねえよな」

少年はおどとする不良達にむかうと、

「俺だって見たことないんだぞー！！！」

と泣き叫んだ。

「あ・・・」

「そ・・・そりゃ悪かったなぁ」

「なんか今日は間が悪いから、決着はもういいわ」

「そうだな。帰る帰る」

帰りかけていた不良集団に、少年は声をかけた。

「ただ見はよくねえぞ」

「あ、やっぱだめ？」

「お前達には、究極のお仕置きをしてやる。・・・バトルモードON」

少年は、スーツを格闘用にモード変換すると、不良たちのど真ん

中突つ込んでいった。

「うおおおりゃあー、全て忘れてしまえ」

少年は不良たちの額を思いっきり殴っていった。少年の一殴りで、不良達はその場に昏倒して行った。最後の一人が倒れた時、少女が不安そうに駆け寄ってきた。

「ひ、博くん、大丈夫なの？ 死んじやったりしてないよね」

「死んじやいねえよ。これから死んだ方が、マシだと思うような目にあわせてくれる」

少年は、悪鬼の形相をしていた。良く見ると、不良達の額に、菱型のフィルム状のモノが張り付いていた。

しばらくして、不良達が頭を抑えて起きだしてきた。

「くく、痛え。・・・ちきつしょう、今日は穩便に済まそうと思つたのに、せめて一発は殴らないと、気が治まらな・・・、グワアアア」

その不良は頭を抑えて叫びだした。

「どんな気持ちだ。んん。さっき、ぶん殴るときに、お前達の一人一人に、特殊なバイオチップフィルムを貼り付けておいた。そいつは、額に張り付くと、皮膚に融合して、脳内に触手を進入させる。」

「何てことすんだよ、痛ててて」

「そうら、痛いだろう。そのチップには、2つのプログラムを与えてある。一つ目は、ケンカや暴力に走ろうとすると、強力な頭痛を起こさせること。もう一つは、勉強をすると、高濃度の脳内麻薬を分泌させ、いい気分させることだ。・・・そのお前、この教科書を読んでみる。」

手近の不良に、少年は教科書を差し出した。彼は、読み進むうちに教科書にかじりついて、懸命に読み出した。

「すげえ、教科書ってこんなに面白かったのか。勉強楽しー」

「マジか。俺にも読ませる。・・・お、お、すげえ！ 俄然やる気が出てきた。」

教科書を回し読みしていた不良達に、少年は、

「お前ら、今日宿題出てたろう。ケンカなんかよりも、よっぽど気持ちはいいぞ」

「そうだった。よし、てめえら、今日は俺んちで勉強会だ。行くぞ」

と言い放つと、ダッシュでその場を後にした。

「これであの低脳どもも、あきらめるだろう。ちなみに、ここ十数分の記憶も消去しておいた・・・」

少年は、うつむいたままそこに立っていた。地面を涙がぬらしている。

「ひ、博くん・・・そんなに見たかったの？」

「見たかったとかじゃなくて、俺よりあいつらが先なのが、くやしんだよ。」

少女は、いたわる様に少年の背中をさすっていた。

「あ、あのね・・・ほ、ほんのちよつとだったらいいよ」

「え？」

「博くんがどうしても見たいんなら、・・・ちよつとただけけど」

「・・・いいのか？」

「ちよ、ちよつとただだよ」

「う、うん・・・」

少女は、少しずつ制服のスカートをたくし上げていった。

少年はそれを固唾をのんで見ていた。

（生美の足、きれいだなあ。俺はなんて幸せもんなだろう）
もう少しで、下着が見えそうになったとき、

「きよ、今日は、ここまでね」

「ええっ、後ちよつとだけ」

「ダメ。これ以上は恥ずかしいモン」

「そこを何とか」

「ダメ、ひ、博くんのエッチ」

「後1センチでいいから」

「ダメったらダメ」

「そう言わずに」

「やっぱりダメ」

そうして、人類はその滅亡までのタイムリミットを一日延ばすことができたのだった。

第六章 プランOP（前編）

その日クラスの女子達は騒がしかった。

「生美ちゃん、ちゃんと打ち合わせ通りにするんだよ」

「でもー、だ、大丈夫かなあ」

「大丈夫に決まってるじゃん。あんたの彼氏でしょう」

「ほら、これ持って。行つてらっしゃい」

「うん、わかった・・・」

少女は、恐る恐る、少年の席に向かった。背後に何かを隠し持っている。そして、少年の側に来ると、

「ひ、博くん、明日の土曜日、時間空いてるかなあ？」

「何だ、生美。とりあえずは何の予定も入ってないぞ」

「あ、あのね・・・えとー、その・・・」

少女が、後ろを振り向くと、友人達が身振り手振りで、応援してくれている。

「あ、あのね、今度できた温水プールのチケットをもらったんだけど・・・一緒に行ってくれないかな？」

少女は、少し頬を赤らめて、少年にチケットを見せた。

「ふむん、温水プールかあ。どうしようかなあ」

「志野さんのお父さんの会社がプールを作った建設会社で、いつばいもらってきたんだって。女の子ばかりだと寂しいから、彼氏や兄弟を誘ってくる娘もいるんだ。だ、だから・・・博くんも一緒に来てくれるとうれしいかな、とか思ったから」

少女は、おずおずと少年にチケットを差し出した。

「温水プールか。たまにはいいかもな」

そう言いながら少年はチケットを受け取った。

「えと、それから、集合時間は10時に駅前だからね。遅れないでって、言ってた」

「了解、駅前に10時ね」

そう言つと少年はチケットを受け取つた。

(プールかあ。あ、そうだ水着を出しとかなきゃな)

少女が、席に戻つてくると、級友達が話しかけてきた。

「どお、上手く渡せた？」

「うん。渡せた。・・・駅前に10時でよかつたんだよね」

「オーケイ、オーケイ。頑張れば出来るじゃん」

「よっしゃ、今日は帰りに水着買いに行くぞお」

「久実ちゃん、ちゃんとお兄ちゃん連れてくからね。こつちも頑張らないと」

「ええつ、何でバレてんの？」

「見てりやあわかるでしょうに。あんたも明日は勝負水着だからね」

「わ、わたしは持つてるのでいいかなあ」

「生美ちゃんスク水以外持つてんの？」

「やっぱスク水じゃあダメかな」

「んー、あんたの彼氏がそこまでマニアックとは思えないけどさあ。確実に浮くよ。むしろ目立つよ。それでもいいのかい」

「い、いや、それはちよつとお」

「だったら来るのよ。生美ちゃんのはあたし達で選んであげるからね！」

「よし、プランOP(Onsui Pool)、ミッションスター
トだ」

「おー」

放課後、少女は級友達とデパートに来ていた。

近場に温水プールが建設された事によって、オフシーズンにもか
かわらず、水着売り場はかなりの面積をしめていた。

「うわあ、結構広いな。色んなのが置いてあるよ」

「まあ、夏場の売れ残りが大半だろうけどね」

「あ、これいいな、可愛くて」

「待てい、生美嬢。それは布が多すぎる。もっと布が少なくて、出来れば上下に分かれているのを探すのぢや」

「例えばこんなやつ」

と、級友が見せたのは、大胆なビキニであつた。

「ひぐん、そんなの恥ずかしいよ」

「それくらい当然。生美ちゃん、明日は勝負に出るんだから！」

「いーから、さっさと試着室行く！ とにかく着てみ」

「そんなの入らないよお」

「泣言ゆってないで、着替える」

「ぐすん」

少女は級友に無理やり選ばされた水着を持って、試着室に入った。

少女が着替えている間、級友達もそれぞれの水着を選んでいた。

「うわあ、志野さんのハイレグも大胆ね」

「あたしはこっちのビキニにしようかな」

「久実ちゃん、ちょっとおとなしすぎ。もうちょっと大胆に行こうよ」

「そついえば、榊さんは？ 未だ出てきてないみたいだけど」

「あれ、本当だ。何やってんだろ。ちょっと覗いちゃえ」

「生美ちゃん、ちゃんと着替えた？ ……ん？ どうかしたの」

少女は試着室の隅にうずまっていた。

「あ、あのね、…下は大丈夫だったんだけど、上の方がどうしても入なくて」

「え？ そんなことは無いでしょう。 あんたに合わせて選んだから」

「どうしたの？」

「生美ちゃん、何か上手く着れてないみたい」

「はいよ、ちよつとごめんなすつて。．．．どうしたの生美ちゃん？」

「上が小さくで、胸が入らないの．．．」

「なにい。ちよつと見せてごらん、ほれ」

「ひくん、そんなに揉んじゃヤダ」

「ゲ、マジデカイ。あんた、そんなのどうやって隠してたの」

「．．．だつて、わたし、背ちっちゃいのに、胸だけ大きかったら、やらしい娘だと思われそうだから、サイズの小さめのブラで締め付けてたの」

「あのね、おっぱいが大きいのはいいコトなのよ。あんたの彼氏もちっちゃいよりおっきい方が喜ぶに決まってるよ」

「どして？」

「どしてつて、男は皆おっぱい星人なのよ」

「ひ、博くんはおっぱい星人じゃないよ！」

「あのねえ生美ちゃん、あんたいいモン持つてんだから、恥ずかしいことなんかじゃないよ。女は出すとこ出して、見せるトコ見せる。それで彼氏を虜にするのよ」

「うん。でもこれどうしよう」

「どうしようつて、入らないんだから違うのにしなきゃね。．．．誰かブラのサイズの大きいやつ選んで」

「んゝ、これなんかどう？」

「よし、ちよつと着けてみ」

「ダメ。未だちよつと苦しい」

「なんだとお。あんたいっただいドンだけ大きいのよ」

「じゃ、じゃあこれは？ 上も下も全部ひもだからとりあえず何とかなるよ」

「よし、．．．どう？」

「ぐすん。．．．入った。．．．でもこれじゃあ、ほとんど裸だよ。こんな恥ずかしいの、着れないよう」

「大丈夫だよ。色も似合ってるし。．．．えーと、それにパオレが

ついでるから泳がないときは、これで少し隠せるよ」

「そーかなあ・・・」

「そーなの。オツケイ、次は久美ちゃん、あんたも未だ露出度が低い。もつと肌を見せて行きなさい、肌を」

「だって、私、榊さんみたいに胸おつきくないし・・・」

「そーゆーときは、こんなやつ。ハイレグにして、背中が大きく出たやつ。男はみんな狼なんだから、目いっぱいえさをぶら下げるのよ」

「ひ、博くんは狼じゃないよ」

「脳みそがちよつと多くても、身体は男なの。明日はあんたのエロイ身体で悩殺しなくちゃなんないんだからね」

少女達のプランは快調に進んでいるようだ。

そのころ少年は、明日の仕度を終えたところだった。

「さて、準備も終わったし、・・・何か暇だな」

少年は最近、ほとんど少女と帰宅していた。少女達が水着を買に行ったので、放課後すぐに帰ってきて、いつもより時間が余ったのである。

（暇つぶしに、NSA（National Security Agency：アメリカ国家安全保障局）のコンピュータでも覗いてみるか）

少年はデスクのコンピュータを起動すると、早速クラッキングに入った。

（クラッキングって言うより普通のログインだな。まあ、あのシステムは、元々俺が作ってやったやつだし。それよりもこのマンションの住人のトラップの方が邪魔くさいな。今度、まとめてワームでもばら撒くか）

少年は浮かぬ顔であちこちを眺めていった。

（おつ、これは何だ？ ふむん、気象兵器か。結構いい線まで進んでるな。でもこれじゃあ、コントロールが甘いな。ちよつとデータを落としておいてつと。・・・後はこつちのメインコンピュータで解析しなおしてつと）

「ふむん、大筋では間違つて無いようだが、磁力線の収束値がこれじゃあ理論通りにいかないし、ターゲットの位置決めも誤差が大きすぎる。・・・ああ、こつちも、この厚みじゃ連続使用に耐えられんぞ。ここはケチっちゃいけないところなんだから、素材変更をして、変形解析をやり直すと・・・未だ、甘いなあ。それじゃ継ぎ目の部分を、少し減らせば・・・ん、なかなかいい値になってきたぞ。グフッフッフ、これが完成すれば大陸規模の災害が起こせるぞ。・・・エネルギー供給は、燃料電池と太陽電池を併用するのか。けちけちせずに核を使えよ、核を。えゝとそれから・・・」

少年は、気象兵器の開発に夢中になっていった。彼の助力により、気象兵器の完成にかかる期間は大幅に短縮されるだろう。

この日、人類は絶滅へとその歩みを一歩進めてしまった。
頑張れ生美！ 人類の生存は君の胸・・・いや肩にかかっている。

第七章 プランOP（後編）

土曜日の朝10時前、温水プール行きのメンバーが駅前にそろいつつあった。

少年と少女が表れたのは、10時5分前であつた。

「おはよ」

「はよーっす」

「生美ちゃん、おはよう。今日も彼氏と一緒になんだ」

「うん、途中で偶然出くわしちゃって」

「10時12分の列車で行くからね。皆切符買つといてよお」

「えと、いくらだったけ？」

「2駅先だから、250円だよ」

「ありがと。250円ね」

「おはよう、遅くなつてごめーん」

「あ、国枝さん、おはよう」

「おはよう、久実ちゃん。そして、このむさいのが、お兄ちゃんの光太郎でーす」

「むさいとは何だ、失敬な。久実ちゃん、久しぶりだね」

「お、おはようございます、先輩」

「みんなそろつてる？ えーと、ひいふうみいの・・・そろつてるみたいね。んじゃあ、そろそろ駅に入ろうか」

「皆、駅入るよー。遅れないで着いて来てねえ」

目的の温水プールは、到着した駅からさほど離れていないところにあつた。

「わあ、結構大きいね」

「他に保養施設なんかも入っているんだってさ」

「皆、チケット持つてる？ じゃあ入るよ」

「女子こっちな。男子は向こうだから。シャワーくぐった先で集合ね」

少年達、男子組は女子達より早めに集合していた。

（生美はどんな水着で来るのかなあ。昨日の夕方皆で買いに行くって言ってたからなあ。期待しててもいいのかなあ）

などと、いつに無くくだらない事を考えていると、ようやく女子達が出来てきた。

「おおー」

男性群からどよめきが聞こえた。学校とは違って、肌の露出の多い水着がほとんどである。ワンピースの娘も身体のラインがはつきり浮かび出て逆にきわどい印象を与える。

「阿久津、お前の近くで良かったよ。たとえ人数合わせでもいい。来てよかった。もう、ここで一生が終わっても悔いは無い」

「ああ、それは良かったな」

少年は棒読みで友人に伝えながら、少女を探していた。

（あれかな？）

髪をアップにしているので、判別がつきにくかったが、一番後ろでピンクの浮き輪を持っているのがそのようだ。だが、様子が変である。何故か前かがみなので、ただでさえ小柄なのに、更に見つけにくくなっていた。

「おおい、生美。何やってんだよ」

「あつ、博くん。・・・ごめんね、髪直したら遅くなっちゃった」

「お、荷物があるんだったら持ってやるよ。かしな」

「いいよ、大丈夫だから」

「ほんとにいいのか？」

「うん、だ、大丈夫」

「じゃあ、これからは基本自由行動ね。貴重品は個人で管理してよ。あと、そっちの男子達、ナンパぐらいは良しとするけど、覗きや痴漢行為は厳罰だからね。それじゃあ解散！」

「はい」

「さてと、俺達はどうしようか。とりあえず座れるところを確保しておいてからかな？」

「そだね」

「あの辺りがすいてそうだな。生美、行くよ」

「あつ、はい」

少年と少女は連れ立って、芝生の植えられている一角へと向かった。

少年は適当なところを見つけて、シートを広げるとそこに腰を下ろした。後からついて来た少女もそこへ腰掛けると胸の前に抱えている荷物を降ろした。

「さて、一泳ぎするか。行こうか生美」

少年が声をかけたが、少女は座ったままタオルで胸を隠したままモジモジしていた。

「ん？ どうしたんだ。具合でも悪いのか？」

「大丈夫。・・・大丈夫なんだけど」

そこへ、少女の級友達がやってきた。

「いっくくみちゃん、上手くやってる」

「あ、由香里ちゃん」

「ああ、何て格好してるの。彼氏に水着見せてあげなよ」

「・・・だって、恥ずかしくて」

「そんなコト言っただけでほうら」

「や〜ん」

少女の両手は友人につかまれて、上に揚げられてしまった。

少女の水着は、黒字に白の水玉の入ったものだったが、それは申

し訳程度に身体を覆っただけのものだった。しかも、胸は特に強調されて、露出していた。

「どう、この娘脱いだらすごいでしょ」

少年は初めて見る少女の姿態に、声も出せずに見とれていた。

「・・・・・・・・」

近くの男性からも注目を浴びている。

「ご、ごめんねえ。胸が入るの、これしかなかったの」

少女は真っ赤になって言った。

（生美ってこんなに胸大きかったんだ。全然わからなかった。それよりこの水着は何だ。ほとんど裸じゃないか）

「ごめんね。こんなに胸の大きな娘ってヤダよね」

「・・・あ、いや、そんなことは無いぞ。胸はあった方がいいに決まってる」

「ほづら言った通りでしょう。男の子は皆おっぱい星人なんだから」

「俺は、おっぱい星人じゃないぞ」

「でも立てないでしょう、勃っちゃったから」

「うっ、・・・すまん生美。生美の身体に欲情してしまった・・・」

「えゝん、博くんのバカ、変態」

「すまん、こればかりはどうにも・・・あ、何とかなるかも」

少年は、リュックの中からいくつかの小瓶を取り出すと、それを目分量で計りながら混ぜていった。新しい薬液が混じるたびに色が変わったり、煙や泡が吹き出すので、異様な光景であった。

「よし、出来たぞ」

完成した試薬に少年は満足そうだった。小瓶を日にかざすと、力オスな色が渦巻いている。

「即席だが、欲情を抑える薬だ。・・・問題は、ちゃんと元に戻るかどうかだが、・・・そっちはゆっくり考えるとして、・・・んぐんぐんぐ、はあ。どうかな？ 上手くいったか」

少年はしばらくじっとしていたが、突然ニヤリと笑うと、立ち上がった。

「俺は欲情を克服したぞ、どうだ、これで文句無かるう」

不適に笑う少年に、由香里は、

「さすがだねえ。こう来るとは思わなかったよ。じゃあ二人で健全な異性交遊でもしてらっしゃい」

と、そう言うと、興味を失ったのか、二人をおいて去ってしまった。

「さあ、生美。俺たちも泳ぎに行こう」

と、さわやかな笑顔で話しかけた。

「ひ、博くん、わたしに何も感じなくなったの？」

「そ、そんなコトはないよ。感じないわけじゃなくって、・・・何てゆうか身体に表れなくしたただけなんだけど。今考えるとちょっともったいないかな」

「わたしは何か複雑な感じ。あ、あんなに恥ずかしい思いで買って、着がえたのに何にも感じなくなった、じゃ女の子としては残念かな」

「そうなのか？ でもあそこのやつみたいに、前かがみで局部を隠しているわけにもいかんだろう。それじゃ全然楽しめないし」

「まあ、そうなんだけどね。わたしは、博くんにもっと喜んでもらいたかったな」

「いや、充分喜んでるよ。しかし、いつの間にそんなに大きくなったんだ。昨日の今日で、そんなに大きくなるモンなのか？」

「・・・だって、わたし小柄なのに胸だけ大きかったら、やらしい娘と思われるかなと思って・・・」

「そうだったのか。・・・でも身体にあってない下着を付けてるのは、良くないと思うぞ」

「由香里ちゃんも志野さんもそう言った。でもさ、大きいブラはすごく高いんだよ。それに可愛いのも少ないし」

「そ、そうなんだ。でも、その水着は似合ってると思うぞ」

少年はそっぽを向いてそう応えた。

「博くん、こんなエッチなのが好きなの」

「いや、エッチいのが好きなんじゃなくて、ガラなんか似合って

るってこと」

「ほんとに？」

「本当、本当だよ」

「ん。なら許してあげる」

（ふう、やつとご機嫌になったな。てか、俺今まで怒られてたのか？ 何か釈然としないが・・・まあ、いいか）

少年は一応少女と仲直りできたようである。二人で、温水プールに入っていた。

「隊長、阿久津・榊ペア、二人の親密度が上がってきたようであります」

「ウフフフ、とりあえず計画通りね。久美ちゃんの方はどう」

「国枝・相馬ペア、相馬久実嬢が萎縮して、進展が見えない模様」

「こっちは、まだまだか。学年とクラスが違うのはハンデが大きいな。何かてこ入れを考えないとならんかもなあ」

その時突然、阿久津・榊ペアを監視していた女子の双眼鏡が、ピシという音と共に使えなくなった。

「ありゃあ。気づかれちゃったみたいね。・・・まあいいや、生美ちゃんの方は上手く行っているようだし。しょうが無いけど、久美ちゃんの方に集中するか」

彼女達の監視に気付き双眼鏡を破壊した少年は、別の問題を抱えていた。

「覗きはNGと言っていた本人が覗きとはね。まあ、これで止めるだろう。それより問題は、これだな」

二人の周りの男達の視線がどうしても少女にいつてしまうのである。

（まあ、エロい格好してるからな。しょうがないとはいえ、気に入らん）

「博くん、たのしい？」

「えっ、ああ楽しいよ。生美と一緒にだからね」

「そか、よかったあ。何か渋い顔してるから、気に入らなかったの
かなって思っちゃった」

「はは、ごめん。周りの視線が生美に向かうのが気に入らなくてね。
これはちょっと面白くないことだな」

「あつと、ごめんね。やつぱスク水の方がよかったかなあ」

「それは止めといた方がいいぞ。別の意味で注目浴びるから」

「アハハ、昨日おんなじこと言われた」

「だろう」

「あ、やつと笑った。渋い顔してるより、笑っている方がやつぱり
ステキだよ」

「そうか？」

「だって、こゝろんな顔してたもん」

「そんなに酷かった？」

「そう、酷かったよう。デモね、良く見ると博くんも女の子の注目
浴びてるんだよ。『これはちょっと面白くないことだな』、なんて
ね」

「そうか？ 全然気が付かなかったぞ」

「博くんは、自分が思ってる以上にイケメンなんだよ」

「そうかあ。全然意識してなかったけどな」

「そうなんだよ。だってわたしの彼氏なんだから、イケメンに決ま
ってるじゃない」

「おい、生美、お前って面食いだったのか？」

「それほど面食いってわけじゃないけど、イケメンならそれに越し
たことはないよ。女の子の胸とおなじかな」
「なるほどね」

などとは愛の無い雑談をしながら、二人はプールを楽しんでいた。

そのころ、例の不良集団といえは・・・、

「おい、この問題どうだ」

「3で割るのでいいのじゃないか？」

「やった、分数の足し算ができるようになったぞ、勉強楽しいー」と、宿題に取り組んでいた。なので今回は出番は無い。

「生美、そっちは急に深くなってるから危ないぞ」

少年は少女に声をかけた。

「だいじょぶだよー」

少女は元気にそう答えた直後、水の中に引こまれるように沈んで見えなくなった。

「生美！」

少年は急いで少女がいた辺りまで泳ぎ着くと、水中に潜った。少女はぐったりとして、口の端から泡がこぼれているように見えた。

少年は、少女に近づくと、抱き抱えて水面に急いだ。水面から頭を出すと、浅瀬まで少女を引っ張っていった。

「生美、大丈夫か！」

急いでプールの外に上がると、少女の様子をみた。心臓は大丈夫そうだが、息をしていない。人口呼吸が必要と考えた少年は、少女を仰向けに寝かせると、人口呼吸をしようと顔を近づけると、いきなり目を覚ました少女の頭で、アゴを強打されてしまった。

「うぐ、たたたた」

目を覚ました少女は額をさすりながら、呻く少年に気が付いた。

「博くん、だいじょーぶ」

「大丈夫かはこっちの台詞だ。お前溺れかけたんだぞ」

「うん、少し水を飲んじやったけど、だいじょぶだよ」

「本当に大丈夫なんだな。凄くビックリしたんだぞ」

「ごめんね。足滑らせちゃった、・・・ああ苦しかった」

取り敢えずは問題なさそうである。

少年はリュックの中からパーカーを取り出すと、

「それでも引つ掻けてろ。身体を冷やさないようにしないと」

「うん、ありがと」

「ついでに、これ飲んどけ。少し楽になるぞ」

そういつて、小さな丸薬を取り出すと、少女に渡した。
「うん」

そう言つて少女は少年のくれた薬を飲み込んだ。

「あ、何かさっぱりする」

「どこも何ともないか？」

少年が少女に訊ねると、

「だいじょ・・・あ、ちよつと向こうを向いてて」

「何だ」

「いいからあつち向いてて。水着の紐が弛んでんの」

「あ、そうか。ゴメン」

そう言つと、少年は顔をそむけた。

「もういいよ」

そう言われて、少年が向き直ると、少し顔を赤らめた少女がいた。

「ついでだから、お昼にしよう。おべんと作つて来たんだ」

そう言つと、シートの上にお重を並べた。

「そうだな、昼時だし」

少しアクシデントはあったものの、少年と少女は楽しい時間を過ごしたのだった。

こうして人類滅亡までのタイムリミットは一日分引き延ばされたのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1490x/>

神の少女と悪魔の少年

2011年12月20日19時45分発行